

通し番号	4920
------	------

分類番号	30-34-16-01
------	-------------

ヒリュウ台木の‘湘南ゴールド’はカラタチ台木と比べ、樹形がコンパクトになるため、段々畑など幅の狭いほ場での管理に向いています	
[要約] ヒリュウ台木の‘湘南ゴールド’はカラタチ台木と比べ、低樹高で樹冠面積が小さいので、段々畑など幅の狭いほ場での管理に向いている。また、栽植密度を高くできるので、10a当たりの収量はカラタチ台木と同等である。果実品質に差は無く、果実階級は小玉果が少なく、大玉果が多い。	
神奈川県農業技術センター・足柄地区事務所	連絡先 0465-29-0506

[背景・ねらい]

本県オリジナル品種の‘湘南ゴールド’は樹勢が強く樹が大きくなるため、当県、県西地域でカンキツが多く栽培されている段々畑では栽培しにくい。そこで、わい性台木であるヒリュウ台木の有用性について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 ヒリュウ台木の定植11年目（H31）の樹高は約3m、樹冠面積は約10㎡で、カラタチ台木と比べてコンパクトであり、この大きさで樹のサイズが落ち着く（図1）。
- 2 ヒリュウ台木の最適な栽植距離は、樹冠面積から想定すると4m×4m、10a当たりの栽植密度（通路を設置しない場合）は63本と想定される（表1）。
- 3 ヒリュウ台木の1樹当たりの収量はカラタチ台木よりも少ないが、10a当たりでは、カラタチ台木より多く植えられるため、カラタチ台木と同等の収量が得られる（表1）。
- 4 果実階級割合では、ヒリュウ台木はカラタチ台木と比べ、L、Mは同程度、S、2Sは少なく、3L、2Lは多い（図2）。また果実品質は、台木による差は無い（表2）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 ヒリュウ台木はカラタチ台木に比べ、樹高、樹冠面積とも小さく、段々畑など幅の狭いほ場での管理に向いている。
- 2 ヒリュウ台木は、枝がしなりやすいため、樹に登る場合は注意が必要である。
- 3 着果過多などによる樹勢の低下と、それに伴う障害果の発生を防ぐため、適切な栽培管理に努める。
- 4 主枝先端に着果させると、主枝が垂れてしまい樹勢が弱るので、主枝先端は摘果をする。

[具体的データ]

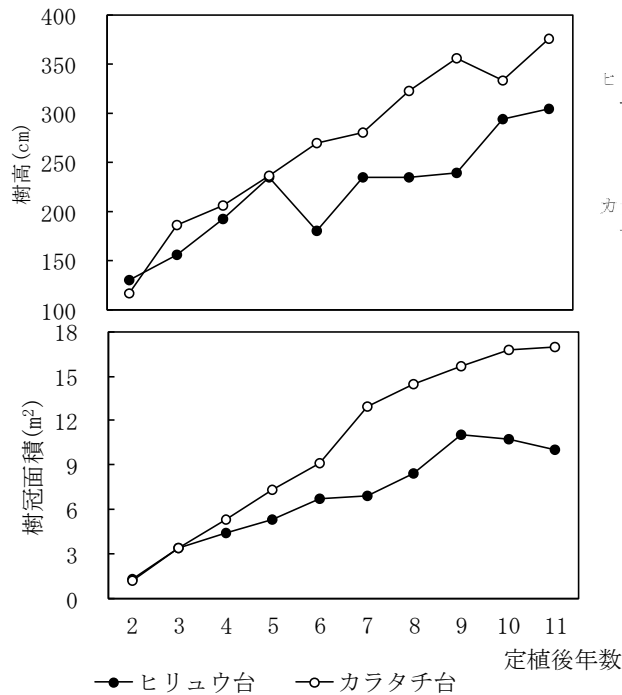


図1 台木の違いによる樹体成長

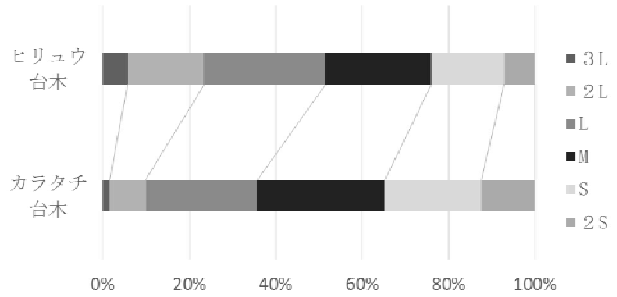


図2 各台木における果実の階級割合 (H29 H30の2カ年平均)

表1 各台木における樹冠面積及び果実収量 (H29 H30の2カ年の平均)

台木	樹高 (cm)	樹冠面積 (m <sup>2</sup> )	栽植距離 <sup>Z</sup> (m)	栽植密度 <sup>Y</sup> (本/10a)	収量 (kg/樹)	収量 (kg/10a)
ヒリュウ	300.0	10.4	4×4	63	40.0	2,520
カラタチ	355.0	16.9	5×5	40	56.6	2,264

<sup>Z</sup>栽植距離は樹冠面積 (H29 H30の2カ年平均) から求めた。

<sup>Y</sup>栽植本数は栽植距離から「カンキツの調査方法 1987年 果樹試験場興津支場編」を参考に求めた。

表2 各台木における果実品質 (H29 H30の2カ年平均)

台木	糖度 (Brix%)	クエン酸濃度 (%)	糖酸比
ヒリュウ	12.3	1.7	7.1
カラタチ	12.4	1.7	7.3

[資料名] 平成22～30年度試験研究成績書(カンキツ・キウイフルーツ等)

[研究課題名] ‘湘南ゴールド’の高付加価値化技術の開発  
加工・業務用ニーズに合った栽培技術の検討

[研究者担当名] 中島修、渡辺茂、二村友彬、深澤智恵妙